

家族間コミュニケーションがその将来像に与える影響 大学生を対象としたインタビュー調査を通して

高山 愛美

人間がその人生において一番初めに所属する社会は家族である。家族とのコミュニケーションは、人生における他者とのコミュニケーションの中でも最も早い時期から行われるものである。これは他者と共に生きていく上で他者とどう関わって行くかを学ぶ土台となる。一方で、人は成長する中で家族の他にも多くの人と関わっていく。その中で、ある人がこれから行う、または行いたいと考えているコミュニケーションは、様々な形でその人が過去に行ってきたコミュニケーションや、そこで学んだことによって作られている。

人と人との関係を形作る要素は様々にあり、一つの要因がすべてを決定しているわけではない。しかし、ある人が家族と築いてきたコミュニケーションを取り上げるなら、それはその人が将来作りたいたいと考えたり期待しているコミュニケーションの形とある程度の関連性があるのではないだろうか。本研究では、その出発点である「育ってきた家庭における家族間コミュニケーション」と一つの到達点である「将来行いたいと考えるコミュニケーション」を比較し、その在り様や変化のパターンを探ることで、家庭のコミュニケーションがその後のコミュニケーションに与える影響について考察を行った。

コミュニケーションの成り立ちや家族間コミュニケーションに関係する文献調査の後、これまでに行ってきた家族間コミュニケーションとこれから行いたいと考えているコミュニケーションについて問う全8件の半構造化インタビューを実施した。分析のため、録音した記録内容からトランスクリプトを作成し、その要所に細かい見出しとなる言葉(コード)を付与していくコーディング作業を行った。それらのコードのうち、共通する考えと少数であるが興味深い考えに着目し、5つのカテゴリーを抽出してカテゴリーごとに詳細な分析・考察を行い、主要なテーマを導いた。

これらの過程を経て、これから行いたいコミュニケーションを考える上では、家族間コミュニケーションはその直接的なモデルとなるだけでなく、家族間コミュニケーションにおいて感じたことを基に方向性や同一性といったコミュニケーションについて考える上での観点を手に入れていることや、家族間コミュニケーションの変化が長期に渡っての自分のコミュニケーションの変遷を知る上で重要な役割を果たしている事が分かった。また、他者とコミュニケーションを行う上で、相手からの影響を受けることについての強い意識や、意見の交換と相手の言動からの推察のどちらに比重を置くかといった点で、家族間コミュニケーションによって作られたパターンが踏襲されている様子を見ることが出来た。

「わたし」のコミュニケーションが迎える変遷は家族間コミュニケーションをただ模倣する、あるいは無関係なものとして切り捨てる、といった単純なものではなく、こうした様々な観点が相互に影響を与えあう中で複雑な様相を示す。そこには、私たちが送る人生の多様さ、そして私たちがそこで行うコミュニケーションの多様さが現れているのである。

(指導教員 武者小路澄子)